

クリストフコトラカミキリの異常型

遠 山 雅 夫

An Antennal Aberrancy of *Plagionotus christophi* (Cerambycidae)

Masao TÔYAMA

4-16, Koshien 6, Nishinomiya, Hyogo, 663 Japan

Abstract An antennal aberrancy of *Plagionotus christophi* (KRAATZ, 1879) (Coleoptera, Cerambycidae) is recorded with an opinion on the antennal segmentation.

筆者 (1984) は以前、甲虫類に現われた付属肢異常を解析し、触角と脚の相同部位、およびこれらの先端部分について、分節の生じる順序の仮説を提案した。今回、これに関連した異常型が発見されたので記録しておく。

クリストフコトラカミキリ *Plagionotus christophi* (KRAATZ, 1879) (図 1)

♂, 長野県戸隠山, VI. 1983, 八木正道採集.

左右両方の触角に対称的に現われた分節異常。両触角の第 5, 第 7 両節が不完全ながら過剰分節を生じかけている。

筆者 (1984) は、一般的な 11 節の触角をもつ甲虫において、図 2 に示されるような脚と触角との相

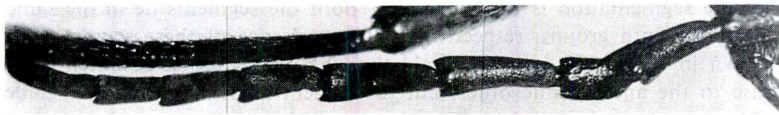


図 1. クリストフコトラカミキリ異常型の右触角先端部.

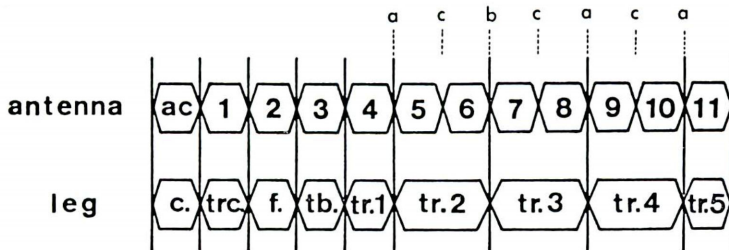


図 2. 触角と脚の相同部位 (遠山, 1984 より転写).

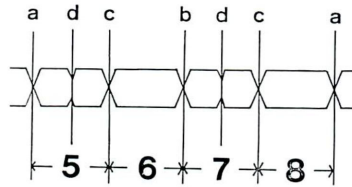


図 3. クリストフコトラカミキリ異常型において生じたと考えられる分節順序 (a→b→c→d と分節がおこったと考える).

同関係を提案し、さらにこれらの先端部分について、分節が (a)→(b)→(c) という順に生じると推定した。これに従えば、触角の (第 5 節+第 6 節) と (第 7 節+第 8 節) の 2 つのグループは、たがいに兄弟グループともいえる関係にあると考えられる。今回の異常型は、この 2 つのグループのなかで、同じ位置にある第 5, 第 7 両節に同じ分節異常が生じたものである。これは前述の (a)→(b)→(c) という分節に、さらに (d) という分節が生じたものと考えられる (図 3)。もし分節が基部から順に生じていくものであれば、このような過剰分節が生じる場合には先端部に現われたはずである。すなわち第 11 節が過剰に分節しているはずで、第 5, 第 7 節で過剰分節を生じた今回のような異常型の説明はできない。

最後にこの貴重な異常型を採集され、これが重要な意味をもつものであると見抜かれたうえで、筆者に調査を委ねられた八木正道氏に、心よりお礼を申し上げる。

Summary

An antennal aberrancy of *Plagionotus christophi* (KRAATZ, 1879) described in this paper agrees well with the hypothesis on the homology between the antenna and leg in the Coleoptera (TÔYAMA, 1984). The basic idea of this hypothesis is shown in Fig. 2, in which the segmentation is indicated alphabetically. According to this hypothesis, the antennal segments (incl. antennal cavity) are divided into nine groups, and the sixth and seventh groups constitute a sister group. In the present aberrancy, the fifth and seventh antennal segments are split, though the segmentation is not complete. Both the segments lie in the same positions as the sixth and seventh groups, respectively. The sequence of these segmentations is estimated as shown in Fig. 3. It is usually said that the segmentation of antennae takes place from the base to the apex in due order, but the present aberrancy cannot be understood by this way. The hypothesis proposed by the author in 1984 may be strongly supported by the existence of this aberrancy.

参 考 文 献

- 遠山雅夫, 1984. 甲虫に現われた付属肢異常一触角と脚の相同部位について一. 月刊むし, (159): 17-24.